

自転車を通じて成長する 子どもたちの姿に 明るい未来を予感

今回ご登場いただく中村博司氏は、文字通り自転車と共に人生を歩んできた方だ。中学の通学に始まり、大学時代にはロードレースの全日本チャンピオンに。1972年に島野工業(現:シマノ)に入社し、メカニックとしてツール・ド・フランスへ参加、営業、宣伝を経て、シマノが開設した自転車博物館サイクルセンターで展示とイベント開催に尽力。1996年からは事務局長として、自転車の魅力、必要性を発信し続けている。そして自ら、毎日30kmの自転車通勤を欠かさない中村氏だけに話の中身は実にリアル。国内外での自転車に関するさまざまな経験談から課題、未来まで、貴重なお話をおうかがいすることができた。

森井博

「自転車・バイク・自動車駐車場 パーキングプレス」誌発行人
NPO法人日本パーキングビジネス協会理事
(サンカパーキング株式会社代表取締役)
一般社団法人自転車駐車場工業会 事務理事

中村博司

自転車博物館サイクルセンター 事務局長 学芸員





中学時代、自転車通学を始めたら 学校の成績が上がったんです(笑)

森井 日本にはこちらのような自転車の博物館が他にもあるんですか？

中村 いえ、ここだけです。博物館法という法律がありまして、4つの要件がそろっていることを文部科学省が認定した所だけが「博物館」として登録されるんです。4つの要件とは、充実したコレクション——当館の場合は当然自転車ですね——を持っていること、展示施設を持っていること、年間150日以上開館していること、そして博物館学芸員がいることです。以上の条件を満たしている自転車に特化した施設は、このサイクルセンターだけなんです。

森井 中村さんはこちらに勤務されるようになってから学芸員資格を取得されたとうかがいました。

中村 はい。その前から自転車の専門家ではありましたが、ここに異動してからは博物館員としても専門家になろうと思い、資格を取るために

大学の通信教育課程を受けました。仕事をしながらで3年かかりましたね。

森井 プロとしての心意気ですね。学生時代から自転車競技をやっていたら、今の仕事にも当時の経験が生かされていると思うんですが。

中村 私は中学生の時から通学で本格的に自転車に乗り始めたんですけど、その頃から、今の仕事だけでなく、自分の人生全般に対して自転車が役立っているんですよ。

森井 どのように？

中村 まず自転車で通学するようになって急に学校の成績がよくなりました。ホントですよ(笑)。片道3キロ、往復6キロぐらい乗ってましたね。家から学校まで自転車に乗ると体を動かして血が巡って頭の回転が良くなる。学校の授業がバチッと頭に入るし、なおかつ身体を動かすのでしっかり眠れるし。

森井 自転車は車と違い、自分で自立しなければいけないですよ。平衡感覚を使うことが1日のスタートとしていいんじゃないでしょうか。そもそも人類が自転車に乗り始めたからまだ200年ほどなのだから、学校の成績アップ以外にもいろんな効果があるかもしれませんね。

中村 車輪を縦に並べるといふ発想が凄いとします。車輪を横に並べて馬車として使用していた歴史は古く、紀元前のローマ帝国とか中国の始皇帝の時代ですから。それを車輪を縦に並べて走らせてバランスがとれるようにしたのは本当に凄い。

森井 私も人間の発明の中では極めてハイレベルの品だと思います。

中村 もっとも、かつては日本で“自転車に未来はない”と言われた時代があったんですけどね。

森井 え、そうだったんですか？

中村 昭和30年～35年頃、オートバイが出てきて、自転車は斜陽産業といわれたんです。シマノも打撃を受けましたよ。

森井 どのように業績を回復させてきたのでしょうか。

中村 二代目社長の島野尚三の先見の明があったればこそだったと思います。自転車はもう終わるかもという世の中の雰囲気だけど、じゃあ車が発達しているアメリカはどうなっているんだろうと視察に行った。すると自転車は遊びの道具として生き残っていた。“じゃあアメリカに進出しよう！”と即断したそうです。そして1965年に「Shimano American Corporation」をニューヨークに設立して部品を販売しました。日本企業の海外進出はまだ珍しかった





有名ロードレース大会で実際に使われたロードレーサーとユニフォームを展示

た時代に、アメリカで自分で作って自分で売ったんですね。その手法を、日本や他の海外市場でも同じように展開していった。そうすることでニーズを先取りして、市場に適合したものを提案し、シマノは生き伸びてくることができたのですね。

森井 そもそもシマノがある堺市は、何故、日本有数の「自転車のまち」として発展したのでしょうか。

中村 その理由は、堺に点在している百舌鳥古墳群が完成した1500年前ぐらいまで遡らなければなりません。あのような巨大な建造物を人間の手足だけでつくることは不可能で、当然、何らかの道具が必要になるのは想像できますよね。その道具を作るために鉄を加工する職人さんがこの辺にたくさん住むようになったことが発端だったんです。

森井 なるほど。

中村 そして時代は飛んで戦国時代。1543年にポルトガルから鉄砲が伝わりましたね。それはすぐに堺商人の目にとまった。鉄砲は日本中の戦国武将が喉から手が出るほど欲しい武器だった。堺商人が古代からこの辺に住んでいた職人を使って鉄砲の大量生産を行ったのです。

森井 その鍛冶職人が継承してきた技術が、後、堺の自転車部品製作に

つながっていったと。

中村 はい。そして私は今“堺商人から生まれた自転車の文化をもっときちんと堺で定着させないと”と地元の方々に申し上げているんです。

森井 自転車が文化として成立するには、どのような条件が必要とお考えですか。

中村 私は、皆が安心して自転車に乗れる環境がないと文化としての定着はないと考えています。ですから、まずは、堺でしっかり自転車の走行環境を整備していくことがこの街の使命だと思っています。

森井 では、今日の「さかいコミュニティサイクル」のグランドオープンイベント(※)は、まさにひとつの成果になりましたね。

中村 そうですね。形に見えるものがやっとできてきたかなという手ごたえを得ました。これを機にさらに加速させなければならないと思っています。

※ 弊誌2010年9月号表紙、およびp32でレポート



昭和11年、当時の皇太子殿下に献上された自転車



戦国時代、堺市が鉄砲職人の町だったことを示す貴重な火縄銃



高齢化社会へ備えるために 自転車専用レーンを電動カートとシェア

森井 私は30年ぐらい前から時々ヨーロッパへ出かけているのですが、当初に比べるとヨーロッパは自転車が走りやすい環境に変わってきたことを痛感しています。自転車先進国の多い国々ですら30年もかかるのだから、日本でもインフラが整うまでにある程度時間がかかるのは仕方がないと思うんです。大切なのは“自転車を主役にした街づくり”を繰り返し提唱していくこと。私たちは、自転車専用道や車道横の専用レーンなどを作るべきだといろいろな場所で提案しているのですが…なかなかそう簡単にはいきませんね。

中村 日本の役所の縦割り行政の弊害で迅速な政策実行が難しいということでしょうね。総理大臣が代わっても目に見えた成果が出てこないのと一緒に、自転車政策も似たようなものなのかもしれません。

森井 総理大臣といえば、思い出すのが3年前に現地で視察したフランスのコミュニティサイクル「ヴェリブ」です。その頃、コミュニティサイクルのようなシステムは日本ではまったく話題になっていませんでした。ところが日本に帰ってきたら、私と同郷の元総理大臣の森喜朗氏が同時期にパリでそれを見ていらっやって、あのシステムについて改めてレクチャーしてほしいということで私が呼ばれたんですよ。そこで、ヴェリブはこういうシステムで、似たようなコミュニティサイクルは、パリだけでなくヨーロッパ全体で既に30都市ぐらいで展開しているんです、

といった話をさせていただいたんです。すると森さんはいたく関心を示して“すぐ日本でもやるように”と国交省の幹部に指示されました。政府として動き出したのはあれが最初でしたね。

中村 私が以前、アムステルダム郊外を自転車で走っていて気がついたのは自転車レーンに自転車だけでなく、電動カートも走っていたことでした。なるほどと思いましたね。

森井 というのは？

中村 ご承知のとおり、日本では急速に高齢化が進んでいます。私も団塊の世代でもう62歳。あと10年～20年もしたら車の免許証を返納すべき



対談が行われた堺市の自転車博物館サイクルセンター正面入口



欧米から集めたさまざまな種類のクラシック自転車も観賞できる





時期がくる。ま、私は10年～20年後でも自転車に乗り続けてると思いますけど、一般の方は移動手段を失うことになるかもしれません。そこで電動カートの世話になる人もいると思うのですが、そのための走行空

理想の自転車発案コンテストで 子どもたちの論理的思考力を育む

中村 私は子どもたちのアイデアにも期待しています。サイクルセンターのイベントで「こんな自転車ほしかってん！コンテスト」というのをやってるんですよ。子どもたちに21世紀の自転車はどんなのがいいか、考えてもらうのです。今年のテーマは“おじいちゃん、おばあちゃんの立場で考えよう。高齢者が安心して乗れる自転車”でした。私は“いずれキミたちもおじいちゃん、おばあちゃんになります、だからこのコンテストで考えるのは将来の自分の自転車です”とコンテストの趣旨を説明しました。

森井 いいアイデアが出ましたか？

中村 9月の中旬頃が締め切りですからこの号が出る頃には出揃っていますね。このコンテストは今年で3回

間は少ないんですよ。

森井 そこで、阿姆斯特ダム流に自転車レーンと共用してはどうかというわけですか。

中村 そうです。自転車専用と決めつけてしまうと、一般市民の中にはあんなの必要ないって人がいる。ならばもうちょっと用途を広げて電動カートも通れるようにするのです。何も自転車レーンは自転車のためのものだけじゃない。誰もが迎える高齢化社会の各人にとっても必要なものだと思うんです。

森井 そうなれば利用者の幅が広がって、ひいては自転車の重要度も認知していただいけそうですね。

目で、最初の年のテーマは“親子三人乗りの安全な自転車”。2回目の昨年はコミュニティサイクル。誰が乗っても盗まれない、壊れない、使いやすい自転車を考えてというものでした。

森井 コンテストの目的は何ですか。

中村 子どもたちの論理的思考力の養成です。こういう問題がある、その原因は何だろう、原因を解決するための方策は何だろうということを順序立てて考えていくと問題解決能力がついてくる。しかもチームでアイデアを持ち寄りながら進めればもっと効果的なんですね。要はプロジェクトチームです。シマノを含めて民間企業では普通に行っていますが、小学校、中学校の授業ではそれをやってこなかった。そこで、私どものコ

ンテストに採用しました。

森井 過去のコンテストの結果はどうでしたか？

中村 感心したのが小学校5、6年生の発表でした。大人の前でも臆せず堂々としゃべり、しっかり発表ができるのです。お恥ずかしいのですが不覚にも涙を流したことがありました。発表会で子どもが言ったんです。“来ていただいてありがとうございます。考えることがこんなに楽しいって初めて知りました”そして“ぜひ成長した私たちの卒業式に来てください”と招待状を手渡してくれたんですよ。明るい未来を予感しましたね。

森井 そういうコンテストを通して子どもたちが、いろんな角度からものごとを考えて判断できるようになる、そのような環境を用意するというのは素晴らしいことだと思います。

中村 これは大人の使命であり、博物館としてできることに取り組んでいます。



サイクルセンターの取り組みは、地元堺市だけでなく文部科学大臣からも表彰されている



“経済政策”として国内に自転車道路を整備したドイツの施策に学ぶ

森井 では、最後におうかがいします。ここ数年、日本では自転車ブームといわれていますが、日本唯一の自転車博物館の事務局長として、どう受け止めていらっしゃいますか。

中村 確かに世間では自転車ブームと言われているのですが、私はブームではないと思います。ブームっていうのは、グーッと上がってしばらくするとズーンと下がるもの。でも私は現在、消費者の皆さんは本当に自転車を欲しいと思って買っているという手ごたえを感じていますから。

森井 自転車は一過性のブームではなく定着したものだ。

中村 はい。日本にもようやく、ヨーロッパやアメリカの自転車を使う人たちのムーブメントが来たと思っています。自転車を楽しむライフスタイルが定着してきたかなと。ただし、まだ課題もあります。これからはもっと女性に乗ってもらわないと。

森井 というとき？

中村 最近は美容やシェイプアップのために若い女性が自転車に乗るようになってきているんですね。それをもっと定着させるのがこれからの

課題。ママチャリに乗っている方々が、スポーツバイクに切り替えていただけるような。

森井 なるほど。

中村 以前、ドイツに行った時、今お話したプランの発展系を見ました。いろんな場所で自転車で旅行しているご夫婦を見かけたんですね。日本もああなるといいなど。

森井 夫婦やグループでの単位が多いですよ、ヨーロッパでは。

中村 大きなカバンをくくりつけてキャンプしながら夫婦で旅をしているんです。話しかけたら子どもたちが自転車をプレゼントしてくれたというんですね。

森井 それは素敵な話ですね。

中村 ドイツは経済政策で自転車道路を作っているのだそうです。というのは、ドイツ人は日本人同様に勤勉でよく働くんですが、日本人と違うのは休みをしっかりと取ることなんです。そして思い切り遊ぶんですよ。かつてドイツ人のバカンスは、ドイツで稼いで、海外のイタリアや北アフリカで過ごすというものでした。要するに国内で得た金を海外でばら



まいてきてしまうんです。

森井 それでは国益にはつながらないですね。

中村 ドイツ人は車、列車、バックパッキング、いろんなカタチで旅を楽しんできた。そんな彼らにとって自転車旅行は最新の旅のスタイルなんです。そこで政府は自転車道路を整備して国内を走ってくださいと支援した。そうすることで自転車旅行者たちは、国内で食事、宿泊、土産物も買ってお金を落としてくれるからです。また、デンマークのケースでは、自転車道路を整備したら、健康増進、生活習慣病の予防に効果があって、結果、医療費が激減した話も聞きました。

森井 日本のようにメタボ診断を企業に義務付けるより、自転車で旅行してもらった方がよほど健康的ですし、地域活性化にもつながる。そのような社会に少しでも近づけるように、この博物館から、自転車文化のさらなる発信をし続けていただきたいと思います。

中村 分かりました。森井さんのほうでもお願いしますよ。

森井 もちろんです！今日はどうもありがとうございました。

